

第十六回 開高健ノンフィクション賞受賞作発表

『空をゆく巨人』

川内有緒



かわうち ありお ノンフィクション作家。東京都生まれ。日本大学芸術学部卒業後、米国ジョージタウン大学で修士号を取得。米国企業、日本のシンクタンク、仏の国連機関などに勤務後、フリーのライターとして評伝、旅行記、エッセイなどを執筆。その傍らギャラリーも運営。「パウルを探して——地球の片隅に伝わる秘密の歌」(幻冬舎)で、第33回新田次郎文学賞を受賞。著書に「パリでメシを食う。」(幻冬舎文庫)、「晴れたら空に骨まいて」(ポプラ社)など。

正賞 記念品

副賞 三〇〇万円

主催 株式会社集英社

公益財団法人ツ橋綜合財団

選考委員

姜尚中、田中優子、藤沢周、茂木健一郎、森達也
(五十音順 敬称略)

選考経過

第十六回開高健ノンフィクション賞は、一六〇編の応募作品の中から慎重に検討し、左記の通り最終候補作を選び、七月七日、選考委員五氏によって審議されました。その結果、上記の作品が受賞作と決まりました。

最終候補作

『ダリエン』

——コロンビア・パナマ国境、
ジャングル突破行』

北澤豊雄

『箱根0区を駆ける者たち』

佐藤俊

『闇からのエクソダス』

舟越美夏

『空をゆく巨人』

川内有緒

第十六回 開高健ノンフィクション賞 受賞者インタビュー

小泉まみ | インタビュアー・文

日本のノンフィクション文学に大きな足跡を残した開高健氏を記念する「開高健ノンフィクション賞」。第十六回受賞者・川内有緒に、受賞作に込められた思いを聞いた。

福島県いわき市の郊外。豊かな自然が広がる里山の一面に、手づくりの野外美術館が存在する。二〇一五年の秋、川内が旅をテーマにしたネット記事を書くためにこの「いわき回廊美術館」に取材を申し込むと、電話の向こうの相手は「人がたくさん来ると困る」と、取りつくしまもなかった。それが本作の主人公の一人、「いわき万本桜プロジェクト」の代表・志賀忠重だ。この物語は、志賀ともう一人の主人公である世界的現代美術家・蔡國強（中国福建省出身）がいわきで出会い、一緒に壮大な芸術作品を生み出していく軌跡を追ったノンフィクションだ。

芸術家と「おっちゃん」の 不思議な関係

蔡國強は、「火薬画」の制作や花火を使ったパ

「人生は、自分にとって 居心地のいい場所を探す旅なのかもしれません」

フォーマンス、九九匹の狼のレプリカを用いた巨大なインスタレーションなどで知られる現代美術家である。「火薬画」とは、火薬が紙やキャンバスの上で爆発を起こすことによって生じた痕跡で絵を描く、蔡独自の表現方法だ。蔡の名を広く世界に知らしめたのが、視覚特効芸術監督を務めた二〇〇八年北京オリンピックの開会式・閉会式だろう。国家体育场（通称・鳥の巣）に向かって歩いてくる「巨人の足跡」を花火で表現した彼の作品を覚えている人も多いはずだ。一方の志賀は、訪問販売など多くの商売を手がけて財をなした経営者である。「俺には芸術はわがんねえ」という志賀だが、まだ無名だった蔡の作品七枚（二〇〇万円ほど）を気前よく購入。いわきの画廊で、蔡の日本初の個展を開いた昔なじみにすすめられたのだ。それをきっかけに、蔡との交流が始まったという。

川内は初めて会ったときから志賀の「普通じゃない魅力」に惹きつけられたという。「志賀さんの話は驚くほどスケールが大きくて、美術館をつくった経緯や蔡さんのこと、万本桜プロジェクトのことなど濃い話を五時間くらい

聞いてヘトヘトになりました」

それなのに川内は、もっと志賀の話を聞いてみたい、と思ったそうだ。

志賀は記事がアップされるとすぐに「いい文章だった」と喜んで連絡をくれた。以来電話やLINEのやりとりが始まり、程なく川内は友人と回廊美術館を再訪する。そのとき、志賀は捕れたばかりの野生の猪を「今から食うべ」とふるまい、帰りには二〇キロもの猪肉をお土産に持たせてくれたという。「本当に強烈な体験でした」と川内は嬉しそうに笑った。

その後も川内は、二〜三カ月に一度の割合でいわきを訪れるようになる。そして二〇一六年の春、初めて蔡國強と出会った。

「あの日、蔡さんと志賀さんは回廊美術館の山に置く高さ八メートルの『再生の塔』をつくっていて、大きな作品だからたいへんなのに、少年がはしゃぐみたいに楽しそう。ふつうの友情とは違う面白い関係だなと思いました。スーパースターと作業着のおっちゃん、どちらが上とか下とかいうのもなく、リスベクトし合いながら、作品をつくることに集中しているんです

よね」

川内はこれまでも、既存の価値観や常識に縛られずに生きている人々をテーマに、ノンフィクション作品を書いてきた。海外暮らしが長かった川内にとつて、同調圧力が強い日本は息苦しいときもある。だから異なる価値観や文化を持つ人同士が、お互いを尊重し合える社会になれば、という思いで筆をとってきた。だが、「日本でもやりたいことを精一杯やっている人に出会うと自分のびのびとした気持ちになります。その生き方を伝えることで、少しでも楽に生きられる人が増えるといいなと」。

そんな彼女が「自由に生きる人の究極バージョン」だという志賀と蔡。だからこそ川内は二人に惹かれ、「二人の物語を書きなれば、それは自分でありたい」と思ったのだろう。

「蔡さんも志賀さんも、生きるってこんなに楽しくていいのか、と思うほど楽しそう。でも決して恵まれていたわけではなく、自分の力でそういう人生をつくり続けているのがすごい」

蔡國強と「いわきチーム」

蔡が日本の公立美術館で初の個展を行ったのは一九九四年、三六歳の時である。それはやはりいわきであった。その「いわき市立美術館」での個展に向け、蔡はたくさん作品プランを

抱えて、前年にいわきに移り住む。そのひとつに、新月の晩に海の沖合で火薬を爆発させ、炎によって地球の輪郭を描き出そうという壮大な野外作品「地平線プロジェクト」があった。

あまりに大がかりなので予算が見合わず、志賀は実行委員会を立ち上げ、周囲に協力を仰いだ。するといわきに住む、やはりほとんど芸術とは無縁の人々が、手弁当で参加してくれた。

「いわきでの『地平線プロジェクト』を無事成功させたのちに、蔡さんはアメリカへ移住しました。その後『市民を動員した大プロジェクト』とたびたび依頼されるようになったそうです。でも蔡さんは、『あれはいわきの人がいて、いわきでしかできないもの。同じことはできない』と断ったと聞いています」

蔡の作品にたびたび登場する代表的なモチーフに「廃船」がある。やがて「いわきからの贈り物」と名付けられるその廃船作品の組み立ては、一部の美術関係者から「いわきチーム」と呼ばれる人々が行っている。リーダーは志賀だ。メンバーは職業も背景もバラバラで、共通点はいわきにゆかりがあることくらい。もちろん美術品組み立てのプロでもない彼らはしかし、蔡の作品づくりの強力なパートナーとして、何度も海外に遠征することとなる。

「蔡さんと話していて印象的だったのは、『人間は、年齢・場所によってやるべきことがある。』

れると思うんですよね」

並行して、志賀と蔡が密かに温めていた構想が、「いわき回廊美術館」だ。蔡の斬新な設計案を受けた志賀が延べ四〇〇人のボランティアと二〇一三年の春に完成させた。

里山の斜面を龍が昇っていくような回廊の美術館は、志賀と蔡の三〇年にわたる友情の集大成とも言える「作品」だ。公的資金に一切頼らず、寄付金とボランティアによる協力だけで運営されている。

人生は居心地のいい場所を探す旅

東日本大震災から、すでに七年が経過した。福島県内一二市町村にまたがっていた避難指示区域は徐々に縮小してきているが、いまだ帰ることができない住民も多い。

「天安門事件」で帰国を諦めた蔡や、原発事故でかつてのいわきを失った志賀、そして大勢の福島の人々の体験を通して、川内は人にとつて故郷とは何かと考えさせられたという。

ワシントンにいても、パリにいても、東京という故郷はなくならなかったと言う川内。そんな「帰る場所、居場所」があるからこそ、人はどこへでも行けるのかもしれない。

「人生というのは、自分にとつて居心地のいい場所を探す旅なのかもしれません。それは故郷



だから、「いわきチーム」とやれることは、「いわきチーム」としかできない」という言葉です。それを聞いて、蔡さんにとつて、まだ無名だった頃に出会った『いわきチーム』は、本当に特別な存在なんだなと思いました」

いわき万本桜プロジェクト

しかし、それだけで終わらないのがこの物語の魅力だ。

二〇一一年の福島第一原発事故により、いわきも放射能に汚染された。放射能の人体への影響、長く使えなくなった土地、そして汚染地域へ近寄りたくないという外部の人々の感情……。そうした負の遺産を未来の子どもたちへ引き継いでしまうことに、志賀は怒りや悲しさ、悔しさを感じていた。

そんなある日、志賀は「山に桜を植えたら、人々の心に希望を与えられるのでは」という思

であり、友人や家族であり、あるいは仕事かもしれない。そうした意味でも、『いわき万本桜プロジェクト』や『いわき回廊美術館』は、誰かにとつての居場所となるような存在だと思いませんか」

三歳になる川内の娘は、志賀を「いわきのおじいちゃん」だと信じている。川内一家にも帰りたくなる新しい故郷ができた。

取材を始めた当初は、「アートが人間を結ぶなんて絵空ごとのような気がした」と語る川内だが、今はその心境に変化が生じているという。「蔡さんの作品にも世界平和を堂々と謳ったものがあります。日本人には大きなテーマを掲げるのはちよつと恥ずかしいという精神性がありますよね。でも照れることなく世界平和と言えるのはすばらしいことだと今は感じています」

本作を書き上げた今、思うことは何か。「今までは、誰にも知られていないひっそりとした物語とか、世の中の暗部や社会問題をあぶり出すような作品のほうが、意義があると思っていました。でも、もうそんなこだわりは捨てました。友情、平和、明るい世界をあえて描いてもいいじゃないかという覚悟が持てたような気がします」

アートや文化には、希望を生み出す力がある。読み終えた後、読者にもそう信じさせてくれる作品だ。



志賀忠重(左)、蔡國強(右)と談笑する川内。 © Kazuo Ono